

『お蔭さま』と思う心。

- きょうの一冊：伊藤雅俊『商いの道～経営の原点を考える～』PHP 研究所，2005
- この本は、本館 3F 企画コーナーにあります。【請求記号：335.13/I89】

商売をする事と生きて行くことはどこか似ているように感じた。この本を通じて、伊藤さんの人柄の良さと、人間としての温かみを感じる事が出来た。人との関わりを大事にし、信用を得るために誠実に生きる事が大切だという事が前面に伝わってくる。これは私たちが生きて行く上でも言える事なのではないだろうか。

本書は商いをする上での理念などが書かれているが、そこから読み取れる物は経済のことだけではない。これから商いをしようと思っている人、もしくはもうすでに商いをしている人には是非読んでもらいたい、そうでない学生にも読んでもらいたいと思った。なぜなら、これから社会に出て行く中でこの本は役に立つと思うからである。

伊藤さんは“人間一人一人を大切にし、誠実に接することによって、信頼を得なければならない”と本書で述べている。私はアパレルで販売の仕事をしていただいているのですが、まさにその通りだと思う。そこでも感じるのだが、お客様というものは大変有り難いものである。商人というのはお客様あっての仕事であるから、お客様がお店に来てくれる事がどれだけ有り難い事か、忘れない事が重要なのである。伊藤さんの母が言っているように『お蔭さまの精神』が根底にある事が大切なのである。最近はお店に足を運んでも「いらっしゃいませ」の一言もないお店がある。そういうお店は印象も悪いし、客が来るのは当たり前と思っているような気がする。確かにセールの時期などは嫌でもお客様の方からやって来る。しかし、何も無い時期の平日などは本当にお客様は来ないものである。私の職場ではそういった時の接客を特に大切にしている。お客様の一人一人のニーズに合わせた接客をし、信頼を得ているのである。伊藤さんが言うようにこうした事が商いの原点なのではないだろうか。

また、伊藤さんは若い人に向けてこんな事も言っている。“若い時の仕事は楽しい訳ですから、十二分に悔いのない仕事をしてほしい。若さはお金で買えない価値があるのだから、その価値を最大限に引き出す工夫をしてほしいと思います”この言葉は今の私にズシンッと響いた。今の若者は何も考えずに『何となく』の人が多と思う。一度しかない人生、それではもったいないとは思わないだろうか？

是非、この本を読んで、何か、自分の中に変化を感じて欲しい。そして、将来何かに行き詰まった時、この本を思い出し、原点に返って欲しいと思う。

(評者：青木 洋)